

宮沢賢治「雨ニモマケズ」考

田口 守

はじめに

宮沢賢治は小・中・高の「国語」教科書に登場する特異な作家で、その人物像は児童生徒に大きな影響を与えている。賢治像の究極には「雨ニモマケズ」があり、教室においてはますます求道者・聖者の風貌を帯びてくる。本稿はこの一編を手帳の日付を手がかりに再考し、賢治像を正しく据え直そうとする一つの試みである。

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

と願うのだが、遺言まで書くはめになったこの年（昭和六年）の九月のことを考えると、この願いは絵空事、夢想に等しいと言わざるを得ないだろう。ここに詠われた「丈夫ナカラダ」は並のものではない。風雨に耐え、雪や炎暑ものものしい屈強・頑健・強靱なカラダ、そんな夢のようなことを本気で賢治は願ったのだろうか。本稿はこんな疑問より出発する。そして結論を手回しよく言って置くと、この詩（便宜的に「詩」と呼ぶ）の末尾、

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ

としてまとめられた希望・願望は、現世のそれでなく、来世に実現を期そうとする祈り、「サウイフモノニ」生まれ変わりたいという本尊への祈り、と考える。だからこの詩は、続けて書かれた国柱会（日蓮宗）の本尊に代わる略式曼陀羅と合わせて読むべきで、これを削除した鑑賞は賢治の真意を汲み誤る虞がある。

一、手帳冒頭部の定位

詩全体を最初に掲げる。

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモ マケズ

丈夫ナカラダヲモチ

窓ハナク

決シテ瞋ラズ

イツモシツカニワラッテキル

一日ニ玄米四合ト

味噌ト少シノ野菜ヲタベ

アラユルコトヲ

ジブンヲカンジョウニ入レズニ

ヨクミキシワカリ

ソシテ ワスレズ

野原ノ松ノ林ノ蔭ノ

小サナ萱ブキノ小屋ニキテ

東ニ病氣ノコドモアレバ

行ッテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ

行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ

南ニ死ニサウナ人アレバ

行ッテコハガラナクテモイヽトイヒ

北ニケンクウヤソシヨウガアレバ

ツマラナイカラヤメロトイヒ

ヒデリノトキハ ナミダヲナガシ

サムサノナツハオロオロアルキ

ミンナニデクノボートヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ

南無無辺行菩薩

南無上行菩薩

南無多宝如来

南 無 妙 法 蓮 華 經

南無釈迦牟尼仏

南無淨行菩薩

南無安立行菩薩^{（注）}

これは黒い手帳（『雨ニモマケズ手帳』）の五〇頁から六〇頁にかけて記されているものである。詩の冒頭の「11.3」の数字から、昭和六年十一月三日の名述と知れる。国柱会が会員に配布した本尊は日連の「佐渡始頭の十界曼陀羅」で「南無妙法蓮華經」の文字を中心に、左右に様々な仏・菩薩・天の名号を配した文字曼陀羅である。

賢治はこの曼陀羅に何を祈ったか。早く元氣になり、風雨寒暑に耐え得る強靱なカラダが得たい、と奇跡を願った訳ではあるまい。この詩に述べられた「丈夫ナカラダ」が、奇跡なくして獲得不可能なものであることは、賢治が一番よく知っていたはずだからである。

賢治の当時の心境を探るために、『雨ニモマケズ手帳』の冒頭四頁までを検討したい。

一頁目

（A）当知是処

即是道場

諸仏於此

得三菩提

一頁目

（B）（a）昭和六年九月廿日

再び

東京ニテ発熱

(b) 大都郊外ノ煙ニマギレントネガヒ

マタ北上峽野松林ニ朽チ埋レンコトヲオモヒシモ

父母ニ共ニ許サズ

癡軀ニ葉ヲ仰ギ熱惱ニアヘギテ

唯是父母ノ意僅ニ充タンヲ翼フ

(c) 18 十一月十六日 就全癒

三頁目

(C) 諸仏於此

転於法輪

諸仏於此

而般涅槃

四頁目

(D) 南無浄行菩薩

南無上行菩薩

南 無 妙 法 蓮 華 經

南無無辺行菩薩

南無安立行菩薩

まず(A)(C)(D)は経文独特の書体で書かれ、少しも崩れたところがなく、意識を集中させて書いたものと思われる。(B)は、(a)(b)(c)それぞれが別筆で記入時期を異にする。(a)が最も早く(b)がこれに次ぎ、(c)は十一月十六日という日付から最も遅い記述と判断され、「雨ニモマケズ」後一三日目の記述と知れる。またbは内容上(A)(C)(D)より後と考えられるから、手帳冒頭は、(A)(B・a)

(C)(D)の順ということになる。

紀文体の(A)と(C)(D)が(B・a)を挟む形をなしているが、(B・a)との先後関係は手元の複製本では確認出来ない。(A)(C)(D)が経文独特の書体で共通し、(B・a)の通常体と異なることははっきりしている。鉛筆の濃淡からいうと(A)が薄く(C)(D)が濃い。まず(A)の経文の書体から、(B・a)の通常体を経て再び(C)(D)の経文体に移行する際の筆圧差と考えられる。いずれにしても(A)(B・a)(C)(D)を同一意識の下に書かれた一連のものとして扱うことに問題はないだろう。仮に(B・a)が先に書かれそれに続けて(A)(C)(D)が書かれたとしても、一頁目を空白にして(B・c)を書いているのは、続けて(A)(C)(D)を書くための予定の字配りと考えられるからである。

二、父母発見の契機

(B・a) 昭和六年九月廿日

再び

東京ニテ発熱

周知のように賢治は昭和六年九月二〇日に東京で倒れ、二通の遺書を書くような事態に見舞われている。「父上様・母上様」宛のものは「九月廿一日」の日付を持ち、「清六様・しげ様・主計様・くに様」宛のものと同じ日の遺書と考えられている。この二通の遺書は東京で客死した場合の用意であつたらしく、賢治自身が生きて父母の許に戻っているので、長くトランクの裏蓋に秘されたままだったという。

ここでは父母宛の遺書を検討して置く。遺書の内容は二つに分けられ

る。便宜上（ア）（イ）とする。

（ア）この一生の間どのどんな子供も受けないやうな厚いご恩をいたゞきながら、いつも我慢でお心に背きたうこんなことになりました。今生で万分一もついいお返しできませんでしたご恩はきつと次の生又その次の生でご報じたいとそれのみを念願いたします。

（イ）どうかご信仰といふのではなくてもお題目で私をお呼びください。そのお題目で絶えずおわび申しあげお答へいたします。

（ア）は父母への報恩、（イ）は父母の浄土真宗に対する日蓮宗・法華の徒としての立場の表明である。（ア）と（イ）は、突き詰めていけば相矛盾することは避けられない。（ア）で父母への謝恩を述べ、次生での報恩まで約束しながら、（イ）では相許さない宗教上の対立を諷かしている。

東北砕石工場の鈴木東蔵宛書簡には病状篤きことを訴えながら、

小生のことはどうせ幾度死したる身体に候間これ以上のご心配はご無用に、且つ決して宅へはご報無之様願上候。（書簡番号395）

と、仕事の上とはいえ他人に「どうせ幾度死したる身体」とまで言いながら父母への連絡を拒む賢治の胸奥には、単に親に無用の心配を掛けたくないという思いの他に、（ア）（イ）の矛盾より発する心のわだかまりがあったのではないか。しかし賢治は二七日に花巻の父に電話し、二八日には帰花して父母の看護に身をゆだねている。これは敗北だったのか、改心だったのか。矛盾を抱えたままの帰郷であったことは想像に難くない。

上記鈴木東蔵宛書簡には、体温を氣して「只只体温器を相手にこの数日を送りし次第に有之」ともあるが、『兄妹像手帳』にはその時の体温

を記入したと思われる次のような頁（同一四七頁）が見える。

| | |
|----|------|
| 19 | 37.2 |
| 20 | 37.3 |
| 21 | 37.9 |
| 22 | 38.6 |
| 23 | 38.2 |
| 24 | 38.2 |
| 25 | |

19、25は日付であろう。

『雨ニモマケズ手帳』はこの『兄妹像手帳』を受けて書かれているようであるが、ここにはなお次の記述も見える。

（ウ）廿八日ニニ熱退ケバ

病ヲ報ズルナク帰郷

退カザレバ費ヲ得テ

（1）一月間 養病

（2）費ヲ得ズバ 走セテ帰郷

次生ノ計画ヲナス

廿八日ニニ

病

次いで一葉の破棄跡を残して、

（エ）一、法華経のおんために

二、父母の恩を報ぜん

三、自らの快楽の故に 他をさまたげず

『兄妹像手帳』の(ウ)によると、賢治は二八日を決断の時と考えていたらしい。この時までに熱が退けば父母に病氣のことを知らせずに帰郷しよう。これは鈴木東蔵宛書簡の「決して宅へはご報無之様願上候」と内容的に一致する。問題は(2)である。病氣療養のための費用を入手出来なければ、「走セテ帰郷 次生ノ計画ヲナス」とは異様な文言である。「次生」とは文字通り来世、死んで生まれ変わる世を意味する。父母への遺言に見えた「ご恩はきつと次の生又その次の生でご報じいたしたい」の「次の生」も、この「次生」のことではないか。「ご恩はきつと次の生」で報じたい、とは父母宛遺言の常套句ではなかったのだ。「走セテ帰郷 次生ノ計画ヲナス」という記述と合わせ考えると、それは極めて現実的な考えに基づいて発せられたものと思われる。輪廻転生を現実のものとして生きる賢治の姿を思い描く必要がある。

東京で「次生ノ計画」を立てることは不可能だったのか。何に生まれ変わりたいかを胸中に思い描くだけならば「走セテ帰郷」する必要があるだろう。どうも賢治にとっての「次生ノ計画」は、そういった観念的なことではないもっと具体的な業を伴うもののようである。冷静な数日の思考と念仏の末に、高次な表現形式を以て描き出される未来像だったのか。「次生ノ計画」は単なる想像でなく、あくまで実現を期しての計画だった。これが後に書かれる「雨ニモマケズ」であると考える。

ここで『兄妹像手帳』の(エ)に「法華経のおんために」の次ぎに「父母の恩を報ぜん」としてある意味も考えて置く必要がある。これは『雨ニモマケズ手帳』の四四〜四六頁の、

厳に 日課を定め 法を先とし 父母を次とし 近縁を三とし
農村を最後の目標として 只猛進せよ

と書いたことにもつながる。「法」即ち法華経を第一、父母を第二、近

縁を第三と記している。これまでの賢治は法華経と農村(法華経と人類)を直結しようと、犠牲的精神を発揮してきた。ここに賢治の悲劇があったことは言うまでもない。いまここに「父母」「近縁」に目を向けた意味は大きい。挫折と見るより賢治の思想体系に現実性・生活性が増加したとすべきだろう。ただ遺書の「次の生」や『兄妹像手帳』の「次生ノ計画」と記した東京において、こうした思想的回心がなされたとは思えないが、異土東京での死の覚悟が「父母」「近縁」に目を開かせる契機になったことは否定できないと考える。「どうせ幾度死したる身体」(鈴木東蔵宛書簡)とは書いているが、今回の死の覚悟は花巻を遠く離れた異土・東京に於てであった点、これまでは本質的に異なる意味を持っていた。

かつて最愛の妹トシの死に際しても、

おまへとみんなとに聖い資糧をもたらずやうに(「永訣の朝」)

と、「おまへ」の他に「みんな」を付け加えることを忘れなかった賢治が、いま父母を第二に、近縁を第三に掲げた意味は大きい。異土・東京で大きな存在として浮かび上がった父母と兄弟姉妹をどう自己の中に位置づけるか。賢治は、次ぎに見る「道場観」の再把握を通して、それを果たそうとしているのだ。

三、道場観

手帳の冒頭部は(B・I・a)を(A)と(C)(D)が挟み込む形で構成されている。(B・I・a)前後の賢治を遺書・書簡・『兄妹像手帳』で追ってみたいわけであるが、『雨ニモマケズ手帳』は帰郷後の新しい出発

点を定めることから開始されている。

(A) (C) は賢治が所属していた国柱会の会員必携の経本「妙行正軌」巻頭の「道場観」を記したものである。訓読したものを掲げると、

(A) まさに知るべしこの処は、すなわちこれ道場なり。諸仏ここにおいて、三菩提を得

(C) 諸仏ここにおいて、法輪を転じ、諸仏ここにおいて、般涅槃したもう

いま自分が置かれているその場所、その状況が修業の場、即ち「道場」であると賢治は解釈したのだろう。賢治はかつて「マグノリアの木」の中に次のような場面を描いたことがある。

〈諒安は、杏を踏み抜き、険しい山谷を渡りながら〉からだを投げようにしてとろとろ睡ってしまひました。

(これがお前の世界なのだよ、お前に丁度あたり前の世界なのだよ。それよりもっとほんたうはこれがお前の中の景色なのだよ。)

誰かが、或ひは諒安自身が、耳の近くで何べんも斯う叫んでゐました。

(さうです。さうです。さうですとも。いかにも私の風景です。私なのです。だから仕方がないのです。) 諒安はうとうと斯う返事しました。

(これはこれ 惑ふ木立の 中ならず

しのびをならふ 春の道場)

どこからかこんな声がはつきり聞こえて来ました。

諒安が今いる険しい山谷は迷いの世界ではなく「しのび」(忍耐)を習うための「春の道場」、修業の場だとの再把握がなされている。『雨ニモケズ手帳』に戻って賢治の今いる場所を言えば、それは父母の膝下である。両親の手厚い看護の下に新しい生活を始めた。いまここで賢治に出来ることは、両親に対する報恩行為、少なくとも恩に謝することだろう。(B-a) は賢治の置かれている場であり、ここを道場と観じる決意が(A)と(C)で明らかにされ、それらが(D)の略式曼陀羅(本尊)につながるという形式を冒頭部は備えている。

(B-a) の状況は(B-b) によって詳しく説明されている。

(B-b) 大都郊外ノ煙ニマギレントネガヒ

マタ北上峽野ノ松林ニ朽チ埋レンコトヲオモヒシモ
父母ニ共ニ許サズ

癡軀ニ薬ヲ仰ギ熱惱ニアヘギテ

唯是父母ノ意僅ニ充タンヲ翼フ

確かにここからは悔恨の響きが聞こえてくる。しかしそう読むべきでないというのが筆者の考えである。この中の「大都郊外ノ煙云々」は大正一〇年正月の東京への家出を、「北上峽野ノ松林ニ朽チ埋レン云々」は大正一五年四月からの下根子様での独居自炊の生活を指すことに疑問の余地はない。しかしそのことを父母が共に許さなかった、と言っているのではない。そう読むと父母は自分の生き方を束縛してきたものとなる。これでは前節の回心につながらない。ここはあくまで「煙ニマギレ」「朽チ埋レン」ことを許さなかったと理解したい。即ち、自分の身を駄目にする、死ぬことを父母が許さなかったと受け取るべきである。そしていま東京で倒れ、「癡軀ニ薬ヲ仰」ぐのは、身を駄

目にする（自分の死）のを父母が願わないからである。「唯是父母ノ意
僅ニ充タ」するための消極的な報恩行為、それが「薬ヲ仰」ぐことなの
である。「僅ニ」の文言の裏に隠されている賢治の思いを引き出せば、
本来なら積極的な報恩行為に及ぶべきところ、病床にあるため「僅」に
ならざるをえない無念さを述べているのである。いま置かれていた
「場」を「道場」と観じての精一杯の行為が「癱軀ニ薬ヲ仰」ぐことな
のである。（B→b）に挫折と諦めを読み取るのは表面的な理解と言わ
ざるを得ない。

手帳の巻頭に掲げた「道場観」は、より積極的意味を持って新しい賢
治を支える役目を果たしている。法華経と、一番身近な父母を拠点に
据えて世界の再把握を目指そうとしている賢治がそこにある。次の詩
からその間の気持ちを読み取っておこう。

「われのみみちにたゞしきと」

われのみみちにたゞしきと、 ちちのいかりをあざわらひ、
ははのなげきをさげすみて、 さこそは得つるやまひゆゑ
こゑはむなしく息あへぎ、 春が来れども日に三たび、
あせうちながしのたうてば、 すがたばかりは録されし、
下品さんのさまなせり。（「文語詩一百編」）

現在の病氣は、父をあざけり、母をさげすんだ報いだとまで言ってい
る。賢治の内部において決定的な転換がなされていることが分かる。病
床での「あせうちながしのたう」つ自分の姿を「下品さんのさま」だ
と自嘲気味に述べている。上品懺悔は現代風に言えば、涙腺・汗腺よ
り血を流し、中品は遍身に熱、涙腺より血、下品は涙腺より涙・汗腺
より汗を流すことになる。即ち下品懺悔は「遍身に徹り熱して、眼の

中より涙づ」（善導「往生礼賛」）という。詩の「すがたばかりは録さ
れし／下品さんのさまなせり」の意味は、「録されし」は「シルサレ
シ」と訓み、善導の「往生礼賛」に書かれているように、賢治は全身
の熱と汗しとどの自分を、形だけは下品懺悔のさまなれど内実はそこ
まで至っていないことを恥じているのである。賢治は父母の手の中に
帰り、手帳第一頁に掲げた道場観にすがって、「癱軀」にふさわしい新
しい道を見出した後の、過去への反省の弁である。それは転向であり、
回心であった。「薬ヲ仰ギ」健康を回復することが、そのとき賢治にで
きる報恩の全てであったと言ってよい。

三、 現世の計画と次生の計画

『雨ニモマケズ手帳』書き出しのころ、賢治が九死に一生を得て回復
に向かっていたことは事実である。先に取り上げた「父母」「近縁」を
含む手帳の一連は、四一頁より書き出されている。その書き出しには
「10.29」の数字が付され、昭和六年一〇月二九の記述と知れる。重
複の嫌いがあるが、後の論の展開上、全文を掲げる。

疾すにて 治するに近し

警むらくは、再び貴重の 健康を得ん日

苟も之を

不徳の思想

目前の快楽

つまらぬ見掛け

先づを求めて 以てせん

という風の 自欺的なる 行動

に寸毫も 委する なく

厳に日課を定め

法を先とし

父母を次とし

近縁を三とし

農村を 最後の目標として

只猛進せよ

利による友、快楽 を同じくする友尽く

之を遠離せよ

この一連の詩(?)を「疾すでに治するに近し」と呼称することにする。健康に明るさが見え始めた時のものである。「再び貴重の健康を得ん日」は、と自己のこれからの生き方の基本姿勢を、賢治一流の生真面目さで記す。詩「雨ニモマケズ」が書かれたのは一月三日であるから、この五日後のことになる。賢治は五日の間隔を置いてで、自己のこれからあるべき姿を「疾すでに治するに近し」と「雨ニモマケズ」の二様に書き分けていたことになる。私見では前者が現世の計画調書、後者が来世の計画調書である。もし「雨ニモマケズ」を通説のように「病気がなおって健康が回復したら」という賢治の思いを補って読むなら、他方が「再び貴重の健康を得ん日」のさまを思考しているのだから、内容的に共通するものを持つことになるが、二者の径庭は大きい。一〇月二十九日に病氣回復を前提としてこれからの覚悟を記述し、五日後に同様の発想で「雨ニモマケズ」をなぜ書き付けねばならなかったか。なぜ「疾すでに治するに近し」の松尾には本尊の略式曼陀羅を記さず、他方に記したか。極端な言い方をすれば、「雨ニモマケズ」にも「疾すでに治するに近し」の中の文言「再び貴重の健康

を得ん日」を補って、

「再び貴重の健康を得ん日」は、サウイウモノニ ワタシハナリ
タイ

と読むのが正しいとは到底考えられない。

「雨ニモマケズ」は何度も繰り返すように来世、次生の計画である。東京で倒れ、『兄妹像手帳』に、

(2) 費ヲ得ズバ 走セテ帰郷

次生ノ計画ヲナス

と書いた賢治。その法華の徒としての深い内省の果てに浮かび上がる転生後のあるべき姿が「雨ニモマケズ」なのである。「雨ニモマケズ」は「病気がなおって健康が回復したら」を補って読むのではなく、「次ぎに生まれてくるときには」を補うべきである。賢治の略式曼陀羅への一途な祈念の姿勢を読み取らなければならない。

「次ぎに生まれてくるときには」雨ニモマケズ／風ニモマケズ／雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ／丈夫ナカラダヲモチ……ホメラレモセス／クニモサレズ／サウイフモノニ／ワタシハナリタイ

四、デクノボー

「雨ニモマケズ」で賢治が祈念したものはどんな自分の姿であったか。不貧欲・不瞋恚・不邪見・不惡口・不両舌等の戒律の他、利他行の実

践とその前提としての丈夫ナカラダである。それにもう一つの願いとして「デクノボー」がある。「丈夫ナカラダ」の願望は、かつて妹と子どもの口を通して語らせたことがある。

(うまれてくるたて

こんどはこたにわりやのごとばかりで

くるしまなあようにまれてくる) (「永訣の朝」)

とし子は自分の虚弱な身体ゆえ、利他行、菩薩行を実践出来なかったことを悔いている。丈夫ナカラダで他人のために苦しむことが出来るように生まれてくる、と。ここに一つの懺悔の姿が見える。いま「永訣の朝」流に言えば、

うまれてくるたて　こんどは「……丈夫ナカラダ」でうまれてくる

と賢治も祈願したのである。

虚弱体質を前提にした現実的、実践的な現世の計画書「疾すでに治するに近し」の他に、次生の転生に期待しての「丈夫ナカラダ」を祈願するもう一つの計画書を書いた訳である。

「デクノボー」についてもいささか触れてみる。賢治のデクノボーの思想は法華経「常不輕菩薩品第二十」に直接依拠する。『雨ニモマケズ手帳』一二頁〜一二四頁にも「常不輕菩薩」を文語詩の形にまとめたものを書き付けている。

あるひは瓦石さてはまた

刀杖もって追れども

見よその四衆に 具はれる
仏性なべて 拝をなす

不 輕 菩 薩

菩薩四の衆を礼すれば

衆はいかりて罵るや

この無智の比丘いづちより

来りてわれを礼するや

我にもあらず 衆ならず

法界にこそ立ちまして

たゞ法界ぞ法界を

礼すと拝をなし給ふ

法華経は、増上慢の四衆（比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷）を見かけて、ただ礼拝・讃嘆して「われ深く汝等を敬う。敢えて輕め慢らず。所以は何ん。汝等は皆菩薩の道を行じて、当に仏と作ること得ければなり」と言う以外に何の修業もしない一人の僧を「常不輕」として登場させている。四衆は彼の「仏と作る」の言を「虚妄の授記」として受けず、罵り、杖木・瓦石で打擲したが、この僧は瞋恚の心を起こさなかった。四衆はこれを輕蔑して「常不輕」（マハー・スターラ・プラーブタ、常に輕蔑された者）とあだ名した。漢訳の「常不輕」では「常に輕蔑しない」と反対の意になってしまいが、これは恐らく僧の四衆に對する言に見える「不敢輕」（敢えて輕めず）からのあだ名であろう。ここは「常に輕蔑された者」即ちデクノボーとしての「常不輕」で、手

帳でも賢治は「無知の比丘（僧）」と正しく受け取っている。法華経はこの「常に輕蔑された者」が他の四衆よりも先に悟りを開き、増上慢の四衆はこれに「皆信伏し随従」した、と伝えている。

賢治は常不軽がなぜに四衆を礼拝したかについて、「四衆に具はれる仏性」に対してであると、一步踏み込んだ解釈をしている。賢治の場合、四衆は農民である。農民から瓦石を投げられても農民の中に仏性を認めて瞋恚を起こさず、常不軽のように礼拝出来るか。これが最後の克服し難い課題となっていたのであろう。賢治はこうしたデクノボー像に早くから関心を持ち、「氣のいい火山弾」「虔十公園林」などその宣揚に務め、一方の増上慢の僧に潜む慢心を「どんぐりと山猫」「貝の火」「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」などで否定し続けてきた。「デクノボー」を法華経的平等の精神において肯定し、「慢心」を競争社会の最大の弱点として否定する。慢心は競争社会・優勝劣敗・弱肉強食の勝者の中に生ずる。どんぐりの背競への諺をもじって一編を仕上げた「どんぐりと山猫」において、どんぐりたちの「一番」を目指すエネルギーに水を掛けたのが、一郎が「お説教」で聴いたというのはデクノボーの教えである。優勝劣敗ならぬ劣勝優敗を「氣のいい火山弾」で描いて見せた。しかしそれらは観念世界のもので、生身の賢治自身は常不軽に近づくことがいかに困難だったか。農民の中に仏性を認め、瓦石刀杖で追われても彼らを拝礼・賛嘆することが出来るか。この克服し難い課題を「丈夫ナカラダ」と共に次生にまで持ち込んでいるところに賢治の誠実さがあろうか。賢治は菩薩ではなかった。

注 1. 賢治作品の引用は全て『新・校本宮沢賢治全集（筑摩書房）』による。

2. 原子朗『宮沢賢治語彙辞典』（東京書籍）。

3. 岩波文庫『法華経・中』による。